



長野都市ガス株式会社 常務取締役 企画・総務部長

塩入 英治
SHIOIRI Eiji

1986年早稲田大学教育学部(同大学ラグビー部)卒業、1986年東京ガス株式会社入社、1998年東京ガスエンジニアリング株式会社出向、2005年都市エネルギー事業部 都市エネルギー公益営業部長、2010年エネルギー企画部部長 エネルギー公共グループマネージャー、2014年長野都市ガス株式会社出向 常務取締役企画・総務部長、長野市環境審議会特別委員、公益財団法人日本産業廃棄物処理振興センター評議員

リオオリンピックにおいて日本は金12個、銀8個、銅21個と過去最高のメダルを獲得し日本中に多くの感動を与えてくれた。

オリンピックにおいて環境問題は大事なテーマであり、リオにおける開会式のテーマは環境保護と世界平和であった。開会式については映像でご覧になったと思うが、注目すべきは聖火台である。大きな炎を燃やす聖火台が一般的であるが、地球温暖化の抑制というメッセージを込めて、あえて小さな炎しか出ない設計にしたとのことである。聖火台の後方には、風力を利用し回転する金属製の羽を配置し、エネルギーの源である太陽を表現している。著者の勤務する長野県においても1998年冬季オリンピックが開催された。その時の聖火台も省エネルギー設計である。通常、聖火台の開口部は上方で



写真1 (聖火台の燃焼面の傾斜に注目)

あるが、正面に向かって燃焼面を30度傾斜させることで少ないガスでありながらダイナミックな炎が感じられるようにしたのである。オリンピック開催時は仮設であったため現在は長野オリンピックスタジアムのある南長野運動公園に展示されている。(写真1参照)

2020年の東京オリンピックが気になる場所であるが、聖火台についてはスタジアム内に設置するのか屋外にするのかは開閉会式のセレモニーの内容に密接に関連することからこれからの検討となる模様である。また、東京都では選手村を水素社会の実現に向けたモデルとすべく、家庭用燃料電池の各住戸設置、水素ステーションの整備、燃料電池自動車・バスの普及など具体的な検討が既に始まっている。水素関連製品は日本の高い技術力の結晶であり、水素エネルギーを本格的に活用する社会を早期に実現することは、資源が少ない我が国にとって極めて重要である。また、東京オリンピックを契機に国内で水素の普及拡大を図ることは、世界に対する環境先進技術のアピールにもなる。しかし、普及に当たっては供給体制の整備、コスト低減、規制緩和など課題が沢山あるが、水素社会をオリンピックのレガシーとして残すべく官民一体となって取り組んでいかなければならない。